

## [ 報 告 ]

キリスト教学校における生徒たちへの「デス・エデュケーション」の可能性<sup>1</sup>

原田 浩司

## はじめに

東北学院大学文学部総合人文学科が例年主催する「教職研修セミナー」は、キリスト教会の牧師たちと共に、キリスト教学校の聖書科教師（教務教師）も対象の射程に入れて行われている。この論考はおもに後者に向けて、学校という公教育の場でキリスト教的な視点から「生と死の問題」を子供たちに教えることの意義について、またその教育効果や課題などを共に考えることを目的とする。

そもそも今日の日本の中学・高校で「生と死の問題」について何らかの教育がどれほど実施されているだろうか。書籍などを通して幾つもの実施例を確認することはできるものの、実際にはそうした事例について統計的なデータは取られておらず、極めて限定的であろうと思われる。また「生と死の問題」を主題とする教科名はなく、年間の時間割の中に組み入れられることもないため、公立の中学校・高校では、総合学習や総合芸術、倫理、現代社会、家庭科、といった科目の中の話題（トピックス）としてそれを取り上げ、それぞれの担当教員が試行錯誤しながら取り組んでいるのが現状である<sup>2</sup>。

では、私立のキリスト教学校ではどうだろうか。公立高校に比べ、私学としての裁量の自由度は高いはずだが、「生と死の問題」を積極的に教育に取り入れようとする学校は必ずしも多いわけではないだろう。だが、もしキリスト教学校で「生と死の

<sup>1</sup> 当初の表題は「子供たちへの…」だったが、表題の通りに改めた。

<sup>2</sup> 鈴木康明、『生と死から学ぶ：デス・スタディーズ入門』、北大路書房、1999年。ここでは大学生に対する、中・高生時代の死生観教育についてのアンケートの結果が報告され、それらの中で、ここで挙げた科目が示されている。

問題」を教育の課題としての導入を検討する場合、この課題を生徒たちに教育するのに最も相応しい教科や教員について議論となれば、疑いようもなく、まず「宗教科」の授業、つまり、キリスト教学校における「聖書科」の授業、そして、それを担当する教務教師（あるいは非常勤講師をつとめる牧師）が真っ先に候補にあがるだろう。いや、むしろその期待は大きいはずである。

上智大学グリーンケア研究所の前所長の高木慶子は死を前提とした教育の重要性を指摘して、次のように述べている：

人間が人間として生き始めるのは「死ぬこと」を自覚したときからではないでしょうか。ということは、人間が人間であるゆえんは「死」の認識にあるとも言えます。しかし大人は子供に、自分たちはやがて死ぬのだということを教えているでしょうか。すなわち死を前提としての「人生の生き方」を示しているでしょうか。

欧米では子供たちに「死について」教えるのは宗教、つまり教会の役割です。ところで、日本にはそのような役割を担うところがありません。そこでその役割を学校に押し付けようとする動きがありますが、それはたいへんなお門違いだと思います。私立学校は別として、学校は宗教教育を行う場ではないからです。…(中略)…

しかし、日本においても全人的教育を考えると、欧米で担っている教会の役割の部分も必要ではないでしょうか<sup>3</sup>。

このように、高木は子供たちへの「デス・エデュケーション」の重要性と共に、そこでの「教会的な役割」を指摘する。そして、キリスト教学校においてその役割の担い手として期待されるのは、宗教主任やチャプレンなどを務める当該校の教務教師たちであることは明白である。また、だからこそ「生と死の問題」を子供たちに教える可能性について共に考察し、検討することは大いに意義のあるものと確信する。

## 1 宗教科教育法

キリスト教学校での聖書科の担当者は、各都道府県の教育委員会から発行される教

<sup>3</sup> 野尻，加地，村上，高木著，『いのちを問う：その重さと大切さ』，ミネルヴァ書房，2005年，155-156頁

員免許状を取得したうえで、その教務を遂行する。そして、この免許状は「宗教」である。公教育における「宗教教育」に求められるのは、その宗教の経典（キリスト教では聖書）や教理に精通していることは当然ながら、実社会における諸問題を宗教的視点から洞察し、その倫理的価値を子供たちに教え、考えさせることのできる教育力であろう。たとえば、私自身が宗教科の教員免許状を取得した時のことを例に挙げると、学生時代に「宗教科教育指導法」という名称の科目を履修した。そして、そこで重視されていたのは「性教育」だった。確かに、中・高のキリスト教学校で学ぶ青少年たちにとって、援助交際や妊娠中絶、また性感染症やエイズ（AIDS）といった、性（セックス）に関わる諸問題は「今・目の前にある」実社会の切実な問題であり、それらを宗教的観点から捉えなおし、自分の人生や命の意義について教え、悟らせることの大切さは、当時も今も共有されているだろう。

性教育の必要性に重きが置かれる一方で、宗教教育の中で「生と死の問題」を教える必要性については、当時は一切触れられなかった。十代の青少年らにとって、性（セックスや異性）の問題と死の問題とでは、興味や関心は明らかに前者に引き寄せられることは容易に想像できる。しかし、今日を取り巻く教育現場での問題を顧みれば、死の問題を取り上げる必要性の認識は以前よりも高まっているのではないだろうか。たとえば、中学校や高校で繰り返される「いじめに自殺」の問題や、教師の体罰による自殺など、いずれも学校での出来事である。さらに、2011年3月11日の東日本大震災を、この東北地方の中・高生たちも経験し、沿岸地域で約2万人に及ぶ人々が津波によって命を奪われた現実を目の当たりにし、中には、家族や友人を失った子供たちも少なくない。今日、教務教師として日々教室で向き合う子供たちにとって、性の問題と共に、死の問題も、生徒たちの「今、目の前にある」事柄として受け止めなおす必要があるだろう。また、それゆえに「デス・エデュケーション」を生徒たちに行うことの必要性やその意義について、またその担い手として期待される教務教師のつとめについて確認することは大切である。

その一方で、性の問題も死の問題も、公教育の場ではしばしばタブー視されがちな課題である点も否めない。性教育との関わりで、講師として立命館慶祥高校で「死の教育」に取り組んでいる清水恵美子氏の見解を紹介しよう。

教育現場では「死」を題材にした授業をとりあげようとする、「教育上の配慮」ということが必ず論じられます。しかし、同じような議論をしていた時期が70

年代からの「性教育」にもあったことが思い出されます。「性の話なんて恥ずかしい」とし、隠された秘めごととして扱われ、性は「タブー視」されていましたが、今日、赤ちゃんはコウノトリが運んでくるとは小学生でさえ信じていません。

しかし死については、大切な人や愛する人との死別で会えなくなって不安に思っている子どもたちに対して、美しいお花に囲まれて天国で休んでいるとか、天に昇って星になっているというように曖昧にしています。

学校で「生と死」を教えることができるのかという議論を前にして、生命体のドラマである人生の最初と最後を見据えることを避けて、どうして「いのちの大切さ」や「生きる力」を子どもたちに語るができるのでしょうか。…(中略)…

ずばり、「死」を扱おうというその目的は、「いのちの尊さ」をわからせるためであり、「どう生きるか」は極めて個人的なことであるからこそ、授業は形だけのカリキュラムをこなせばよいというものではなく、また何らかの結論を整えるという意識だけで子どもとかかわろうとすれば、「いのち」の本質を見失い、これまでの知識偏重の教育に陥りかねない危うさをはらんでいることを指摘しなければなりません<sup>4</sup>。

死の問題と向き合うことは、子供たちに「いのちの尊さ」を考えさせ、悟らせる貴重な機会となる。それゆえ、公教育において、性の教育と死の教育の「タブー視」を克服し、取り組むことには意義があり、そして、教務教師はそのいずれのテーマもキリスト教的観点から洞察して、生徒たちに伝え、教えることが求められるであろう。

## 2 「死の準備教育」から「いのちの教育」へ

「Death Education (デス・エデュケーション)」を直訳すれば「死の教育」であるが、80年代は「死の準備教育」という表現が適用され、長らく使用されてきた。しかし、近年この言葉の使用機会も極端に少なくなっている。代わりに「いのちの教育」や「いのちの授業」といった表現、すなわち、平仮名の「いのち」の言葉の使用が顕著である。漢字の「命」ではなく、あえて平仮名で「いのち」と表記することには意味がある。平山正実は漢字と平仮名の使い分けについて次のように述べる：

<sup>4</sup> 清水恵美子、『いのちの教育：高校生が学んだデス・エデュケーション』法蔵館 2003 年、9-10 頁。

医者 of 救える「命」を、わたしは漢字の「命」というふうに表示してみたいと思っているのです。しかし、命はそれだけではない。わたしは、同じ命でも、日本人が昔から「気」という言葉で表してきたようなもっと根源的な生のエネルギーのようなものによって支えられている命があるのではないかと考えております。それを、わたしは平仮名の「いのち」というふうになづけたいと思うのです。…(中略)…「命」と「いのち」は相互に分かちがたく結びついているものです。しかし、あえて言えば、一方は生物的「命」(ギリシア語=ビオス)であり、他方は霊的な「いのち」(ギリシア語=ゾーエー)と言えるのではないのでしょうか。生物学的な「命」と霊的な「いのち」とは次元が違いますけれども、人間はその両方に関わりを持っている。

すなわち、霊的な「いのち」というのは、生物学的な「命」を根底において支えている人格的な部分をさすものと私は理解しています<sup>5</sup>。

ここで平山が述べるように、人間は生物学的な「命」と霊的な「いのち」という二つの次元を生きる存在であるという人間理解を提示し、特に「霊的 (Spiritual)」次元において人間を捉えなおし、自分と隣人をみつめ直す視点を生徒たちに伝えることは、キリスト教学校の教務教師に期待される務めであろう。そして、この「いのち」の大切さや尊さに、子供たちがいかにして気づくことができ、関心を向けることができるようになるか、が問題となる。

NPO 法人生と死を考える会の活動<sup>6</sup>に参加してきた杉本脩子は、この問題について次のような見解を述べる：

「いのちの大切さ」が<sup>7</sup>、いろいろな場面で語られます。新聞などの活字になることもしばしばです。このことに異論をはさむ余地はなく、誰しもがそう思っているに違いありません。けれども、本当に私たちはいのちを大切にしながら生きているだろうか、私たちが生きている今の社会は、かけがえのないいのちを大切に生きることのできる社会かと問いかけた時に、残念ながら「イエス」とは言いにくい状況にあること、これも多くの人の共通の思いでしょう。

<sup>5</sup> 黒鳥偉作、平山正実、『イノチを支える ―癒しと救いを求めて』、キリスト新聞社、2013年、16-17頁。

<sup>6</sup> 現在の活動については <http://www.seitosi.org/> を参照。

ふだん私たちは「いのち」をとりわけ意識することはありません。生きているわたしたちにとって、あまりに当たり前の前提だからです。空気や水と同じような感じですが、いのちを意識する時というのは、私たち自身や私たちの親しい人が病気になったり、事故に遭ったり、いのちの危機に直面した時ではないでしょうか。それがある時にはあることにすら気づかない、失ってはじめて見えてくる、その究極が「いのち」かもしれません<sup>7</sup>。

「当たり前」だったはずのものが、失って初めて気づくその価値や意義については、多様なケースが考えられよう。特に「いのち」の問題を考える上で、その喪失時から捉えなおすというダイナミックな視座が「デス・エデュケーション」には不可欠である。教務教師としてこれに従事する上では、特に聖書的な視点を大切にしたい。特に「終末論的」視点は、この問題においても有益である。終わりの時から今をみつめ直すときに、新鮮な意味を帯びた「今」が浮かび上がることが多々ある。「今日」という一日に「終わり」があることを意識する時、この日はまさに今日しかない、かけがえのない特別な一日として浮かび上がる。その「かけがえのなさ」は、その「終わり」を意識してこそ明瞭になる。中世の修道院で、修道士たちが毎日早朝に交し合った「メント・モリ (Memento Mori: 汝の死を覚えよ)」の言葉は、まさに「終わりの時」から今日を生かされている自分を見つめ直す言葉として解釈できる。それゆえ、「死」という終わりの時から「生」の意義を捉え直すことは、まさにキリスト教の伝統的なアプローチの仕方であると言えよう。広い意味で「終末論的」な視座から今を見つめ直す意義は大きく、またそのような視点を子供たちに伝え、提供することは、教務教師の働きの一つの重要な課題となるだろう。

### 3 死生観教育がもたらす効果

公教育における「死の問題」についての教育は、欧米諸国に比べて日本は遅れている、としばしば指摘される。ここでは、カール・ベッカーによるアメリカの死生観教育をめぐる論考を紹介し、その教育がもたらす「効果」に注目しながら考察していく。中学校、高校には青少年の段階でも、近親の人の死（二人称の死）、その中でも特

<sup>7</sup> NPO 法人 生と死を考える会編『いのちに寄り添う道』一橋出版、2008年、359頁。

に父母の死を経験した生徒たちも少なからずいるという点は、見過ごしてはならないだろう。キリスト教学校におけるチャプレン（宗教主任）に期待される牧会的な役割には、クラス担任の教員と共に、そのような「二人称の死」を経験した青少年たちと向き合い、彼（女）らに寄り添っていくことも当然含まれるであろう。またそのために、そのような子供たちも念頭に置きつつ、死生観教育を実施していくことも重要な課題となる。とりわけ、「二人称の死」という深い喪失体験・死別経験を受け止めきれず、その悲嘆を自力で解決できない子供たちが、周囲から放置されることで、彼ら・彼女らにどのような影響もたらされるかを念頭に入れておくことも切実な課題である。

ベッカーは、このような「二人称の死」を経験する子供たちの存在と、死生観教育の意義とを関連付けて、次のように論じている：

中学生・高校生になると、園児や小学生よりは感情を言語化できると期待されるが、タブー視される死に関しては、相談せずに処理できずに抱え込んでいるティーンエイジャーが多い。英語では「未解決悲嘆（unresolved grief）」や「困難で複雑な悲嘆（complicated grief）」という専門用語で、病的にまで転じてしまう悲嘆の抱え方を認識し表現している。これらの悲嘆は、注意欠陥障害のみならず、自殺や殺人にまで繋がるとされており、他人の死に基づく「未解決悲嘆」は、自殺の大きな引き金の一つとして注目を浴びている。…(中略)…

死別によって、学校の成績や人間関係が悪化することが多いにもかかわらず、教師がその原因に気付かなかつたり、対応に迷ったりすることも少なくない。生徒はそれまで積極的に参加した活動に消極的になり、部活を辞めたりする。普段「そんな子供ではなかったはず」の子供でも、死別によって、言動が急変してしまう。例えば、くどく質問を繰り返す子供、嘘や噂をむやみに広げる子供、侮辱・冒瀆・わいせつなどを言いだしたりする子供が増える原因となる。場合によっては、それらの行為・表現が、死別体験から数年も経って初めて現れることもある。教師が死に関する訓練を受け、事前に死別経験をもつ子供を認識していれば、適切な指導ができるようになるのである<sup>8</sup>。

<sup>8</sup> 島菌進、竹内 整一編、『死生学Ⅰ—死生学とは何か』、東京大学出版会、2008年、81-82頁。

このように「死別による悲嘆」を自力で解決できない子供たちに迫る危機を回避する<リスク・マネジメント（危機管理）>も、学校の教師に期待される役目の一つとなる。「二人称の死」を経験した子どもが「未解決悲嘆」を自ら解決する（納得し、受容する）ことのできる道筋、またそのための援助を備えることで、その先に待ち受ける重大な深刻な結果に陥ることを回避できる、という効果を「デス・エデュケーション」に期待することができる。それゆえ、ベッカーは、公教育における死生観教育は子供たちが自らそのような諸課題を解決する糸口を自ら見つけ、克服する力を会得する機会になるとして、その積極的な意義を見出す。そして、死生観教育の必要性とその効果について、彼はこう論じる：

死生観教育は死や死別という人生の大事な課題を取り上げることによって、逸脱行為や精神的な病を予防できる。ワクチンの予防注射は、重くて危険な病原菌を適宜に軽量、子供に与えることによって、本物の病気に対する免疫力をつける。不完全な比喻ではあるが、死生観教育も、重くて危険な精神異常に及ぶ死別・喪失体験を、適切でごく軽い程度、子供に与えることによって、本物の死別に出会った場合、それに対応するだけの心構えと相談能力を用意できるのである。死に対して鈍感になることなく、その重さを理解・受容してもらおうがゆえに、親近者に死なれても、順調な立ち直りが可能になるのである<sup>9</sup>。

こうしたアメリカの事例は、日本よりもプラグマティズム（実用主義）であるとの印象を持つが、いのちの尊さを教えることはもちろん、実際の教育効果を十分に踏まえて、「デス・エデュケーション」を実施していくことも大切である。特にこの教育における牧会的な意義を自覚して取り組むことの意義は、強調しても強調しすぎることはない。「未解決悲嘆」から、さらに深刻な精神病理へと進行しない予防策になり得る、とのベッカーの指摘は十分に耳を傾けるべきものである。そして、これらの教育的な効果を見据えて、ベッカーは日本の公教育でも死生観教育を積極的に導入することの必要性を、こう述べる：

本来は死生観教育にあたるものは、学校で教える類の教育ではなく、お寺でも

---

<sup>9</sup> 同 83 頁。

各家庭でも教えられてきたはずである。そうであるなら、一般の学校で教える理由とはいかなるものなのか？ 学校は現時点でも教える科目が多く、新しいカリキュラム導入に対する抵抗が予想される。あえて学校で死生観教育を導入する理由について考える必要がある。

あえて言うならば、教育の意義のほとんどは、将来のための「準備」であると言えよう。…(中略)…何よりも確実に、心に刻まれる体験は、人との死別である。100%確実にやってくる死に対して、学校で取り立てて何の教育も行われなかったのは、かつてはその体験的教育は家庭や地域社会に必ず存在していたからである。しかし、以上で見てきたような社会変容により、現在では住宅で家族親族の死を看取る機会が皆無になっているため、死に対する準備教育の大事な役割について学校で施されない限り、人生のための基本的な準備すらできないことになる<sup>10</sup>。

少子・高齢化など、今日の社会環境は大きく変化し、特に子供たち、青少年を取り巻く環境は大きく変容してきている。今なお変容し続ける社会の要請として、公教育において「死生観教育」を取り入れることの意義は大きい。

#### 4 公教育における「死の授業（デス・エデュケーション）」の取り組み

次に、公教育の場で、死をテーマにした教育に取り組んでいる事例から、中学と高校からそれぞれ1つの具体例を紹介する。また、ここではそれらの典拠の書物での表記に即して、「死の授業」という呼び方で統一する。

##### 4.1 中学校における取り組み

まず、岡崎市立常磐中学校で「死の授業」を実施する天野幸輔教諭の事例を紹介する。時間割上は「総合学習」の時間で行われている。

中学生に対して「死の授業」を実施する必要性として、天野は次の5つを挙げる：

- ① 子供たちは数々のメディアからあふれでる、極端に脚色された死を目の当た

---

<sup>10</sup> 同 83-84 頁。

りにしながら生活している。

- ② そもそも子供は思春期に死に対して親和的になる傾向がある。
- ③ 思春期に大脳の連合前頭野を中心とする「よりよく生きる」ことを考える部分が成長する。
- ④ 悪性疾患の増加などの原因により、身近な人の死に直面する子供が多い。
- ⑤ 核家族化の進行と病院死の増加で家族を看取った経験のない子供が増えている<sup>11</sup>。

そして、天野は中学生校における死の授業の留意点として、1) 子どもが悲観的にならない授業の流れの設定、2) 具体的にイメージしやすい資料の開発、3) 愛する人の死に直面している人の存在に気づかせる、などを挙げて、誕生からライフイベント全体を俯瞰する中で死を取り上げるなど、死だけをクローズ・アップしすぎない工夫をするよう心掛けていると述べる<sup>12</sup>。子供たちには、死を抽象化することよりも、具体化することの方が効果的であり、そのために、イメージしやすい題材や資料、たとえば、ペットなどの動物の死や、ビデオ、スライド、絵本、漫画などの視聴覚教材も駆使する工夫も必要となる。また、その際には、ストーリー展開についても、ハッピー・エンディングかどうか等も含め、天野は学ぶ生徒たちの心理的ストレスを緩和する工夫を凝らしながら、取り組んでいる事例を報告している<sup>13</sup>。

#### 4.2 高校における取り組み

次に、筑波大学付属高校で「死の授業」を実施している熊田亘教諭の取り組みを簡潔に紹介する。時間割では「倫理」の時間に行われている。

熊田は通年で「死の授業」を行い、2000年度に実施した「死の授業」シラバスは次の通りである：

イントロダクション：「死」のイメージについて

第1回：身近な人や生き物（ペット）の死

第2回：死の恐怖について

<sup>11</sup> 中村博志編著、『死を通して生を考える教育：子供たちの健やかな未来をめざして』、川島書店、2003年、124頁。

<sup>12</sup> 同125頁。

<sup>13</sup> 同126頁。

- 第3回：死ぬまであとわずか。あなたならどうする？
- 第4回：病名告知をめぐって
- 第5回：延命治療と尊厳死
- 第6回：自分の葬儀をデザインする
- 第7回：お墓について ～墓は必要？ 大切？ なぜ？ 自分の墓をデザインする
- 第8回：闘病記を読む ～千葉敦子『「死への準備」日記』
- 第9～10回：日本のあの世
- 第11回：古代エジプト人のあの世 ～ミイラに込められた秘義
- 第12回：キリスト教・イスラム教の死生観／現代脳科学の死生観
- 第13～15回：自殺について ～自殺を考えたことある？ 自殺は悪？
- 第16～18回：臓器移植について ～自分の臓器を提供できる？
- 第19回：交通死について ～運転手（加害者）にどの程度の刑罰が相当？
- 第20回：まとめ<sup>14</sup>

死の授業（デス・エデュケーション）には、当然ながら、教育実施要領はなく、熊田が授業計画の設定の段階から、幅広いトピックスから、生徒たちが興味や関心を引き付けるものを選ぶなどの工夫や試行錯誤の跡が窺える。そして、このシラバスに即して「死の教育」を実施したうえで、生徒の側にある課題と教師の側にある課題という両面から、熊田はその課題を指摘する。

まず、「生徒の側にある課題」として、熊田は「生徒が（おおかたは無意識的に、時に意識的に）抱きがちな優生思想的な価値観 — 社会的に「役立つ生」と「役に立たない生」を区別して、「役に立たない生」は失われてもかまわない（さらに言えば抹殺すべきだ）とする価値観 — とどう対決していくかという課題」<sup>15</sup>を挙げる。これは「いじめ」の問題にも通じる課題であり、青少年の心に潜むこうした「心の闇」また「罪」に向き合い、対峙していくことは大切であり、教務教師として、聖書の言葉を携えて、彼らと向き合うことは、キリスト教学校においては、特に重要となるだろう。

次に、熊田は「教える側の課題」として、自らを省みながら、このように述べる：

---

<sup>14</sup> 同 143-146 頁。

<sup>15</sup> 同 147 頁。

自らの死生観が確立していない人間が「死の授業」に取り組んでよいのか…

私の感想として、このような授業を継続的に実践していくことはかなり難しいのではないかということがある。…「死の授業」がいかに意義のある授業であったとしても、授業である限りマンネリ化、劣化という運命を逃れられるものではないからだ。

たしかに最初のうちは、自らも新しい知識を得て、それを教材化する喜びがあり、授業での生徒の積極的な、ときに思いもかけないような反応に驚くことも多いだろう。それらの喜びや驚きが、教員を「緊張」させ、授業を生き生きとしたものに保つ。だが、それが何年か続くと、授業がワンパターン化してゆくのが自分でも分かる。

教員にとって、たとえそれがどのように重要な内容であろうと、同じ講義内容を新鮮味をもって話し続けることは容易なことではない。対象となる生徒こそ毎年度変わるが、かれらの反応とて次第にある程度予測できるようになる。…

このような変化は、どのような授業についても問題であるのだが、とりわけ「死の授業」においては致命的な変化なのではないかという気がしてならない。死という非常にデリケートなテーマを扱う授業にふさわしい「緊張」が、そのような授業展開のスムーズさによって欠け落ちてしまうように思えるからだ<sup>16</sup>。

「授業のパターン化」によって、教える技術が練磨されるなど、それ自体が必ずしもマイナス面だけをもたらすものではないが、熊田はそれによって失われてしまいがちな緊張感こそ、「死の授業」では大切である、と実際の経験から指摘する。高校での「死の授業」では、教師の側の真剣さや熱意などの言外の姿勢を含め、死というテーマに相応しい授業の環境づくりも課題となる。

### 4.3 子供たちの成長段階に応じた教育

以上、中学と高校での「死の授業」の実施例を紹介した。両者の相違点は、中学校での事例では、生徒たちの心理的ストレスを緩和する配慮が課題として挙げられたものの、他方で、高校での事例では、むしろある程度の心理的ストレスとしての緊張感を保ちつつ、授業が実施されることが望ましい、ということになるだろう。授業の内

---

<sup>16</sup> 同 148-149 頁。

容や難易度もさることながら、生徒たちの成長段階に応じた授業展開は、空間づくりの重要性も含め、必要になってくる。

ここで紹介した二つの事例ともキリスト教学校での実施例ではないため、どのような教材を選ぶのか、またどのような主題を設定するのかは、キリスト教学校ならではの選択肢も加わるだろう。

### むすびにかえて

最初に引用した高木の「欧米では子どもたちに『死について』教えるのは宗教、つまり教会の役割です」という言葉に示されるように、キリスト教学校で「生と死の問題」の教育の担い手として期待されるのは、やはり教務教師になるだろう。また、多くの牧師たちが非常勤講師としてキリスト教学校の聖書の授業を担当している点も鑑みれば、教会の牧師たちにとっても、この問題は決して「対岸の火事」のテーマではないはずである。むしろ「教会の役割」として、牧師たちも問題意識を共有し、この問題に自覚的に取り組む必要があるだろう。

今日、キリスト教学校の教務教師たちが生徒たちに死の問題について教えることを念頭に置き、その準備をはじめるとは喫緊の課題であると言えるのではないだろうか。そして、ここで論じた問題意識を持ちながら、デス・エデュケーションを自らの教育に取り入れる可能性を検討する段階にすでに来ているだろう。適切なデス・エデュケーションは生徒たちの人格的成長と霊的成長の一助となる。そのためにも、教える者自身が、聖書的、キリスト教的な死生観を確立するだけでなく、その教育的効果を踏まえつつ、生と死に関わる多様な問題を見渡す幅広い視野も具えて、これに取り組むことが、教育の現場に立つわたしたちの課題である。

(文学部総合人文学科 助教)